

丹沢で出会った生きものたち

平塚市博物館 浜口哲一

私が初めて丹沢を歩いたのは、中学2年生の夏、今から40年も前のことです。生物部の合宿ということで、蓑毛からヤビツ峠を越えて札掛に泊まり、菩提峠を越えて帰ってくるというのが、初体験の丹沢でした。それから十年ほどの間、毎年、相当の日数を丹沢で過ごしました。学校の山小屋があった札掛が中心でしたが、西丹沢にもよく出かけ、5万分の1地形図の「秦野」図幅にいかにも多くの赤線を引くかを楽しみに歩き回っていました。

その道々、いろいろな生きものたちに出会うことができました。その後も、いろいろな機会に丹沢を歩いたたびに、その変化にも注目してきました。そんな生きものたちのいくつかを紹介しながら、丹沢の自然の特色と、保全上の問題について自分なりの考えを述べてみたいと思います。

マルバダケブキ

札掛の山小屋を根拠地に丹沢を歩いていた頃、早朝小屋を発ち、丹沢山から三ツ峰を越えて宮ヶ瀬までとか、塔ノ岳から鍋割山、桧岳経由で玄倉までとか、しばしば長い尾根歩きをしていました。そのコースの一つに、蛭ヶ岳を越えて道志川流域に下るといいうわゆる丹沢主脈がありました。

真夏のある日、もう何回も歩いたそのコースを進んでいたのですが、暑さのためか、ばててしまい、棚沢ノ頭まで来た所で眠くてしょうがなくなってしまう



写真1 マルバダケブキ 平塚市博物館提供

した。同行の友人達に1時間昼寝と勝手に宣言して、ササの中に寝ころんだ時の気持ちよさといったらありません。30分ほど寝たのでしょうか、ふと目をさますとあたりのブナ林の林床に黄色い大きな花が点々と花をつけており、その花にはアサギマダラが何匹もフワフワと飛び回っているのです。もうろうとした意識の中で見たその光景は忘れられないものの一つです。

その黄色い花がマルバダケブキという種類であることを知ったのは、だいぶ後のことでしたが、近年この植物が相当に増えているようです。それは、なぜかニホンジカがこの植物を好まないためだと考えられています。一方で、オオモミジガサのようにほとんど姿を消してしまった植物もあり、それもニホンジカが原因のようです。ニホンジカの存在は、丹沢の稜線部の植生に大きな影響を与えていることは間違いありません。

丹沢という山にとって、標高1500mから1600mあたりの自然は、単に稜線部というだけではない大きな意味を持っています。丹沢には、シラベなどの常緑針葉樹におおわれた亜高山帯というものはありません。しかし、動物をみても、亜高山要素と呼べる種類がいくつか存在しており、ルリビタキ、メボソムシクイといった鳥が繁殖しているのがその例です。これらの鳥は、稜線部に僅かな個体数がしがみつくように生活しており、そのエリアの環境変化は、そうした鳥達にも影響を及ぼす恐れがあります。

ニホンジカをどう扱っていけばよいのかはみんなが頭を悩ませている難しい問題ですが、狭い稜線部に集中することが生態系にマイナスであることは明らかなので、いかに低標高地に分散させるかが大きな課題になっています。私は、基本的には山の中腹、つまり丹沢であれば、標高800m以上には人工林を広げない、現在人工林になっている所も将来的には広葉樹林に戻していく努力も、ニホンジカの棲み場所を広げる意味で重要なことの一つではないかと思っています。

イワシャジン

大学1年生の秋だったか、御殿場北方の籠坂峠から



写真2 イワシャジン 平塚市博物館提供

札掛まで、丹沢を横断する尾根歩きを計画したことがありました。自分を試したいというような気持ちもあって、テントを背負って自炊での一人旅でした。ところが、この山行は予想を大きく越える困難なものになりました。山梨県との国境尾根は、台風の影響で膨大な数の風倒木におおわれ、一つ倒木を乗り越えると、次の倒木が待ち受け、道を見失うこともたびたびといった状況だったのです。1日目には大柵ノ頭を越えるのがせいっぱいで、次の日は菰釣山を過ぎ、城ヶ尾峠にたどり着いたのがもう日が傾こうという頃でした。札掛まではとても無理と諦め、畦ヶ丸を越えて善六のタワから少し下って沢に出たところで、2日目の夜を迎えることにしました。翌朝、まる1日以上誰一人に会うこともなく歩き続けた山旅の最後を飾ってくれたのが、西沢の岩壁を彩る青紫色をしたイワシャジンの花でした。

イワシャジンは、特に西丹沢では林道の崖にもよく見られる普通の植物ですが、全国的に見ると、その分布は中部地方東部から関東西部の山々の一部に限られており、フォッサマグナ要素植物の一つに数えられています。丹沢の自然の特色の一つは、標高の割には多様な生物相を持っているということがあげられますが、その要因の一つは、富士山周辺の山々だけに分布するイワシャジンのような植物がいくつも数えられる点にあります。

イワシャジンは不思議なことに、東丹沢では稀ですし、箱根山地ではほとんど見ることはありません。地域が違えば、その土地の歴史、地質、土壌などいろいろな要素を反映して、動植物相には微妙な違いが見られます。個々の種についての詳しい分布情報を把握していかないと適切な保全をすることはできないのです。

アオフキバツ

直翅類と呼ばれるバツやコオロギの仲間に興味を持ったのは、大学を離れ、博物館で仕事をすることになってからでした。神奈川県内にどんな直翅類がいるかを調べ始めたところ、自分が丹沢で撮った写真の中に不思議なバツが写っているのを見つけました。それは、菩提峠で撮ったもので、写真でみる限り成虫でも翅のないアオフキバツという種類にあたるように思えます。しかし、アオフキバツは北方系の種で、当時知られていた南限は八王子だったのです。あまりにかけ離れた分布に半信半疑でしたが、その年の夏にバツ探しに菩提峠に出かけてみました。

現地に行ってみると、意外にあっさり目的の虫を見つけることができました。確かに菩提峠にはアオフキバツが分布していたのです。しかも、普通、アオフキバツが見られるような林縁部ではなく、茅葺き屋根の材料を得るために伝統的に管理されてきたカヤトの草原に棲んでいたのが特異に感じられました。

その後、丹沢大山総合調査の折りに、二の塔の中腹にも生息していることが分かりましたが、今のところ丹沢でもこの種類が見られるのは、この付近に限られています。

菩提峠は、さまざまな開発にさらされてきた所です。林道が貫通し、人工スキー場が作られたこともありました。イチゴ栽培も行われています。それでもススキ草原という環境が辛うじて保たれてきたために、アオフキバツが生き続けてきたのです。ブナ林や、溪流のように誰が見ても自然度が高い場所だけでなく、カヤトのように人手の入った環境にもそれをよりどころにしている動物がいる、このことは環境保全にはきめの細かい配慮が必要だということを示しているでしょう。



写真3 アオフキバツ 平塚市博物館提供



写真4 タゴガエル 平塚市博物館提供

タゴガエル

タゴガエルは不思議な声のカエルです。沢筋の石が積み重なった下や伏流水に潜んで鳴くものですから、その声が微妙に反響し、ワウワウとかキャウキャウとか犬の遠吠えのような声に聞こえます。

博物館の仕事で、平塚のカエルの市民参加調査に取り組んだことがありました。何ヶ月かの調査を続ける内に、参加者の中にカエルファンが何人が生まれ、そんな方達と平塚にはいないカエルを訪ねようと計画したのが、丹沢にタゴガエルを訪ねる会でした。当時、私が知っているタゴガエルの確実な生息地は一ノ沢峠の考証林だけだったので、ヤビツ峠から長い林道歩きをして目的地に向かいました。まだ冬枯れの沢でカエルの声が聞こえた時には、嬉しくもあり、案内役としてほっとしたものです。

その後、このカエルは丹沢の沢に広く住んでいることを知りました。何も札掛の先まで行かなくても、蓑毛から春岳林道をちょっと登った沢でたくさん声を聞くことができました。大山山麓の仏様を祀った小さな洞窟で、崖からのしたたり水の中に、白くて大きな卵を見つけたこともありました。

丹沢の自然の大きな特徴の一つに、大小の沢が発達し、しかも遡行してその自然にふれられる場所が多いということがあげられます。カワガラス・カワネズミ・ハコネサンショウオなど豊かな沢の自然を象徴する生きものも少なくありません。

しかし、40年前、山歩きを始めた頃に比べると、沢筋が荒れてきたことは否めません。その一つの原因は、沢を横切る林道工事にあります。ハコネサンショウオの幼生をよく見かけた沢に出かけたところ、川原に大量の土砂が積み上げられていてびっくりしたことがありました。その近くまで林道工事が伸びてきていたのです。大雨でも降って、土砂が沢に流れ込んだら、大きな影響は免れないだろうと胸が痛みました。

その当時は、サンショウオ類の分布図も作られておらず、しかたのない面もありました。しかし、総合調査によって、貴重な生物の分布が明らかになってきた今、乱暴な工事を避ける配慮が不可欠になっていると言えるでしょう。